

やわたにし 八幡西遺跡発掘調査説明資料

公益財団法人 山形県埋蔵文化財センター 平成 28 年 11 月 23 日 (水) 13 時

調査要項

遺跡名(番号)	八幡西遺跡(遺跡番号 382-172)
所在地	山形県東置賜郡川西町大字西大塚字八幡西(因幡一)
時代・種別	古代～近代の集落跡
起因事業	一般国道 113 号梨郷道路事業
調査委託者	国土交通省東北地方整備局山形河川国道事務所
調査機関	公益財団法人山形県埋蔵文化財センター
現地調査	平成 28 年 5 月 16 日から 12 月 16 日まで
調査面積	約 7,000㎡
調査担当者	主任調査研究員 菊池玄輝(現場責任者) 調査員 板橋龍 長谷川大旗
検出遺構	掘立柱建物、溝、井戸、土坑、柱穴
出土遺物	土師器、須恵器、陶磁器、古銭など

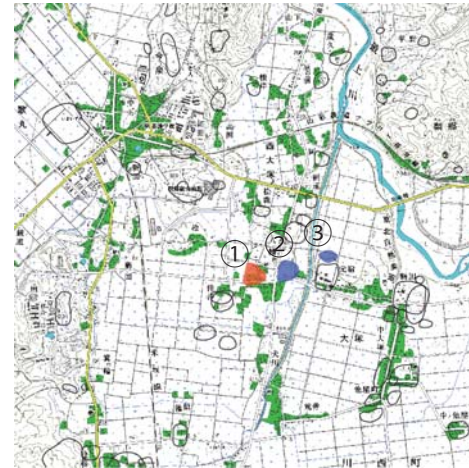


図 1 遺跡位置図(1/50,000)
①八幡西遺跡 ②八幡一遺跡 ③元宿北遺跡

1 調査の概要

八幡西遺跡は川西町の北端(西大塚)に位置しています。整備が進む国道 113 号「梨郷道路」(新潟山形南部連絡道路の一部)事業区間に当たり、平成 25 年度の元宿北遺跡、同 26 年度の八幡一遺跡に続き、計画路線部分の発掘調査となりました。本調査は前半を B 区、後半を A 区として 2 回に分けて調査を折り返し、今回は A 区の成果報告です。来年度は、現在調査事務所のある、C 区を調査する予定です。

2 見つかった遺構と遺物

前回の B 区で南半分を占めていた低地部は、予想に反し、A 区では南東部で収束しました。その分、微高地は B 区より更に大きく広がり、安定した立地に遺構が密集して見つかりました。以下では現段階の理解で、時期別に代表的な遺構について説明します。

縄文 SK427 から縄文の石器(石匙)が出

土しました。

古代 古代の遺構は少数ながら、全域に点在しています。そのうち、東西方向の 2 条の溝(SD 2・457)は B 区からの延長線と推定され、A 区より更に西方へ続きます。

SP45(図 8)からは、木製の鍬が出土しました。柄を差し込む造りになっています。SK3(図 11)からは、炭化物が付着した須恵器の甕が出土しました。また、近世の遺構、SK434(図 4)から、風字硯や土師器、須恵器が出土しました。ほかには、土坑が数基検出されました。

中世 現時点で明瞭に中世代と認定できる遺構は見つかりませんが、今後の調査や整理作業で分かってくる可能性もあります。

近世以降 A 区の調査では近世以降の遺構がもっとも多く見つかりました。これらは建物や井戸、区画溝などが組み合い、総体として村の屋敷地を形成するものと考えられます。

北部では近代の濠(SD403)と切石組みの水場遺構(SG415)を中心に、近世以降の

導水路(SD408・409・413 ほか)が集中しています。濠内では複数の丸太が出土し、水漬けのため定置されていたと考えられます(貯木遺構)。中央部にも幅広の溝(SD429・441)があります。溝より新しいものの、溝沿いには染め桶の設置された藍染用と考えられる土坑が複数見つかりました。桶内には藍色の染料がわずかに残っています。また、付近には性格不明の大型土坑(SK434)が位置します(図 4)。ほかに、土坑(SK405)から古銭が 6 枚出土しており、六文銭としての埋納が示唆されます。SK406 から古銭が重なって出土しました。

南部からは、竪穴建物、溝、特殊な土坑が検出されました。竪穴建物は 2 棟検出されました(SI16、SI36)。SI16(図 6)は楕円形で約 10.5 × 3 m、深さは床面まで約 50cm です。覆土から、多数の炭化材、火を受けた痕跡のある陶磁器が出土したことから、焼失建物と考えられます。遺物は覆土から、近世以降の陶磁器が出土しました。SI36(図 2)の約 9 × 5.5 m の長方形で、床面までの深さ約 30cm の大型の竪穴建物です。遺物は、覆土・床面から陶磁器や簪など、近世の遺物が出土しています。

溝は、B 区に引き続き多数検出されています。SD4 は南北に延びる溝で、調査区中央付近で、西側に屈曲します。この遺構から、

多数の杭と杭の外に礫を詰め込む欄干が検出されました。遺物は寛永通宝や文久永宝といった古銭のほか煙管などの金属製品、陶磁器などが出土しました(図 10)。

その他の特殊な遺構として、SK34(図 9)があります。SK34 は、低地部から検出された、長楕円形の土坑です。中には弓なりに曲げられた底板が設置され、横に杭が打たれていました。上部構造は失われていますが、水車を支持する構造物と想定されます。

A 区では柱穴が数多く検出されています(図 5)、掘立柱建物として組み合わせるものが少なく、現在のところ SB13 の 1 棟のみ確認しています。SB13 は 1 × 1 間の建物で、時期はまだ分かりません。掘立柱建物は、調査で得られたデータを基に今後は整理作業で組合せを再考します。

3 まとめ

今年度の A・B 区の調査内容を振り返ると、当遺跡は古代(奈良時代)に集落(※周縁)が開かれますが、中世には人が去ったかのように低調になり、近世になると氣勢が上がって屋敷が形成されていきます。一般的に近世以降の遺跡は、文献史料や絵図などの資料が多く存在します。今後はこれらも探索し、当遺跡の内容や性格をより明らかにしていきたいと思えます。



図 2 SI36 竪穴建物
床面検出状況(北から)

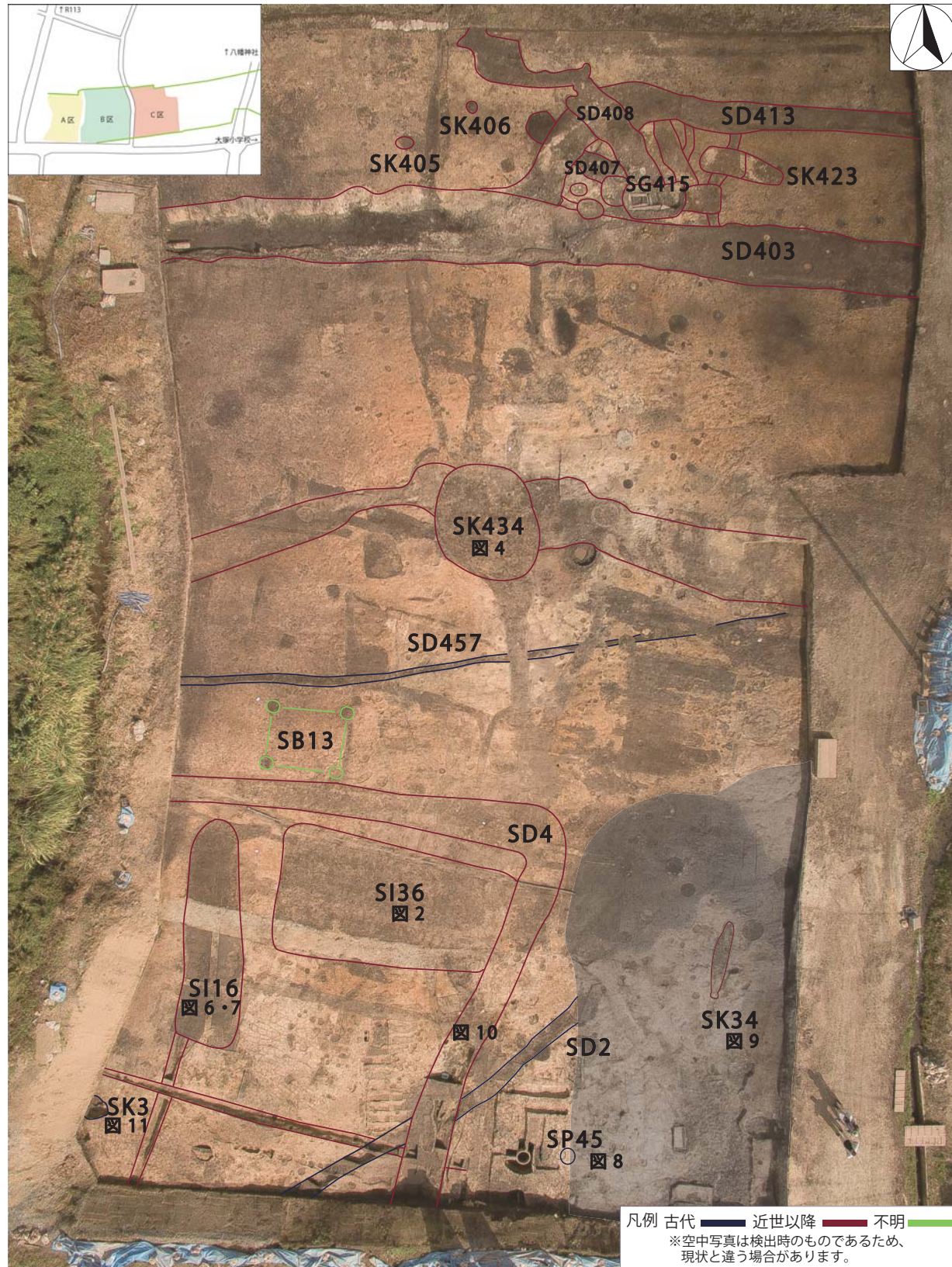


図3 A区遺構検出状況（垂直）



図4 SK434 大型土坑（南西から）



図5 南側柱穴群 検出状況（東から）



図6 SI16 竪穴建物 遺物出土状況（南西から）



図7 SI16 遺物出土状況アップ（西から）



図8 SP45 柱穴 木製鎌出土状況（南東から）



図9 SK34 土坑 構造物出土状況（南から）



図10 SD4 溝跡 古銭出土状況（南西から）



図11 SK3 土坑 土層断面（南西から）